

## 研究の概要

### 1 研究主題

#### 「対話し、学び合う児童の育成」

～「見通す・学び合う・振り返る」学習活動を通して～

### 2 主題設定の理由

子どもたちが成人する頃には、社会は厳しい競争や挑戦の時代を迎えていると予想される。若い生産年齢人口が減少し、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化し、就職する職業の在り方についても、現在とは大きく様変わりすることが指摘されている。こうした変化の時代を乗り越え、伝統や文化を大切にし、夢や意欲を持った自立した人間として、他者と協働しながら、未来を切り開いていく「生きる力」を身に付ける教育が求められている。

今の子どもたちの実態として「判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べること」「自己肯定感や学習意欲や社会参画の意識等が低いこと」等があげられている。新しい時代に必要となる資質や能力の育成には、知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりを、より意識した教育を行い、子どもたちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要となる。

本校の研究課題としてあげられることは、「お互いにわかったことや気づいたことを伝え合うことはできているが、それらのことから考え合ったり深め合ったりする姿が少ない。」「自分の考えの変容については、振り返りの場面で見られない。」「根拠を示しながら自分の考えを発表することが苦手である。」「授業の課題をどのような視点で設定し、課題解決に向けて教師がどのような発問や指示をするのか。児童が意欲的に取り組む課題設定や発問が必要となる。」である。

このような課題を解決していくために、子どもたち一人一人が課題を持ち、友だちや教師との関わり合いを通して、新しい考え方に気づいたり、自分の考えを深めたり、教え合ったりする対話を取り入れた学び合う授業を工夫すれば、思考力・判断力・表現力を含めた「確かな学力」が育成され、豊かな人間関係を形成していくことにつながっていくと考える。

「授業改善プラン実践事業」推進校として、21世紀をたくましく生きるために必要となる「生きる力」の育成と、国語科と社会科の2教科を中心に本校児童の実態を分析し、PDCAサイクルで授業改善に努め、県が示す「授業改善のポイント」を基に、長坂小スタイルの授業を構築し、発信するために主題を設定した。

### 3 研究仮説

「見通す・学び合う・振り返る」学習活動において、対話を取り入れた学び合いの授業を工夫すれば、児童に、思考力・判断力・表現力を育むことができるであろう。

## 4 研究の基本的な考え方

### <対話>

一対一のみでなく、複数以上の他者との相互交流も対話とする。また、言葉による対話だけでなく、感性・感覚の交流、無言の意思伝達も有効な対話と捉える。つまり、他者との伝え合い、通じ合い、響き合うことは、言葉のみでなく、いかなる方法でも対話とする。さらに、めざしている「対話力」とは、皮相的・形式的な「浅い対話」ではなく、かかわる人々相互の内面に迫る「深い対話」である。

「浅い対話」・・・儀式のような対話，皮相的・形式的な対話。

指示，連絡，報告などに終始し，議論の深まりがない対話。

「深い対話」・・・知的爆発（次々と論議が発展する），知的化学変化（自分の見方や考え方が変化したり広げられる），知的共創（語り合うことによって共感したり，新たな高みに至る）が随所で起こり，対話の愉悦を堪能できる対話。また，対話することにより，新たな知見や解決策が共創できる対話。

（多田孝志「授業で育てる対話力」）

### （１）「対話」とは

本校では「対話」を、「一対一で言葉をかかわすこと」といった日本語としての意味合いだけではなく、より広い意味として考える。

①教材や課題等と、じっくりと向き合うこと（教材との対話）

②共に学び合う仲間や教師と、意見や感想をかかわすこと（教室の仲間や教師との対話）

③これまでの自分の考えと、向き合うこと（自分自身との対話）

このような対話をするためには土台となる「対話力」が必要である。その中身としては、聴く力・質問する力・伝える力・視る力・つなげる力等である。

自分の思いや考えをしっかりと持ち、自分が話し手になったり、聴き手になったりするなど「言葉のキャッチボール」を繰り返しながら、相手を理解し、互いに高め合う事でより質の高い対話が行われものとする。そして、対話を通して、見方や認識が変わったり、物事を多角的・多面的にとらえたり、新たな「発見」や「気づき」が得られることが大切である。

### （２）「学び合う」とは

子どもたち一人ひとりが課題を持ち、友だちや教師との関わり合いを通して、新しい考え方に気づいたり、自分の考えを深めたりする。そして、学び合いの場が、知識・理解や技能の習得だけに留まらず、友だちや教師の関わりを通して、思考力・判断力・表現力を高め、豊かな人間関係を形成していくようにする。

## 5 研究内容

### ○対話する学び合いの授業創りに努める。

・児童が「話したい」「聞きたい」「質問したい」という切実感や必要感，知的欲求を喚起するような教材提示・課題設定・発問や指示を工夫する。

・「分かったふりをしない」「分からない人に教える」「人の話をよく聴く」「課題解決をあきらめない」ことに重点を置いた対話型授業創りに努める。

### ○いろいろなグループによる交流活動における学び合いの指導法を研究する。

・一方的な伝達ではなく、相手の思いや考えを受けて、考えを高めていけるような学び

合いになる指示や支援を工夫する。

- ・ Q U 検査の分析を基に，すべての児童に居場所がある学級・学年経営に努める。

#### ○確かな学力を定着させるための主体的な取り組みを習慣化する。

- ・ 児童自身が「何を学ぶのか」『見通し』を持って学習に臨み，「何を学んだのか」「何がまだ不十分なのか」めあてを意識した『振り返り』をさせる。学んだ達成感と，学んだ内容の再認識を行い，次時へつながる学習意欲の見通しを持たせる。（基本となる授業の流れの徹底・学習計画表の活用等）
- ・ 業前タイムの計画と実践。（月・水・金）
- ・ 「家庭学習の手引き」を活用して，家庭学習の定着を図る。また，図書館を中心にして朝の読書や家読や読み聞かせに関係機関と連携して取り組む。

#### ○多面的な言語環境の充実を図る。

- ・ 有効な板書計画やノート指導。
- ・ 話型の段階的指導に努める。また，全校で聴き方の統一を図る。（目・耳・心で聴く等）
- ・ 校内の言語環境の整備をする。
- ・ 「長小学びの手引き」や「言語活動ハンドブック」を活用し，主体的に学べるようにする。
- ・ タブレット端末や電子黒板等を活用した授業を仕組む。

#### ○実態分析とPDCAサイクルに則った授業改善を行う。

- ・ 全国学力・学習状況調査，山梨県学力把握調査，C R T 等の結果から学力を分析する。
- ・ 分析結果から本校の課題及び方策を考え，具体的な取り組みを作成する。
- ・ 児童の生活習慣や学習習慣等の状況把握と課題を整理し，授業改善に生かす。
- ・ 研究の内容や成果は，「学力向上フォーラム」や公開研究会，本校のホームページ等で発信していく。

## 6 改善の視点

- 授業の課題をどのような視点で設定し，課題解決に向けて教師がどのような発問や指示をするのか。児童が意欲的に取り組む課題設定・発問・補助発問を工夫する。
  - 児童の興味を引きつける掲示や課題設定，分かりやすい板書も大切である。児童の発した言葉の羅列では課題解決に向けてぼやけてしまうので，さらに有効な板書の仕方や掲示の仕方について考える。
  - 何について，何のための対話をするのか，子どもが必然性を持っていたか。また，対話にどういう言葉が出てくればよいのか，教師が具体的に児童の考えを想定しておくことが必要となる。
  - 「見通し」と「振り返り」を大切にすることによって，何を学び，何を学んだのかをはっきりさせる。
  - 充実した対話を成立させるには，普段の学級経営から考えていかなければならない。相手の話をよく聴くことや，言いたいことが言えるような雰囲気づくりから考えていく必要がある。
  - 目標に迫るための対話を行うためには「深める」場面で追加の発問が必要である。
- ※ 知識定着の「教える授業」から，『見通す→学び合う→振り返る』学習活動という「考える授業」にシフトするために効果的な指導法を研究する。

## 7 国語科・社会科の課題と改善に向けての方策

### (1) 国語科

#### □本校の課題

- ・目的や必要に応じて、文章の中で中心となる言葉や文に注意しながら読んだり、その言葉を用いて文章の内容や自分の考えをまとめたりすることに課題がある。

#### ○改善に向けての方策

- ・本校の課題から、発達段階に合った課題を明確にして指導していく。

(低学年)

- \*時間的な順序や事柄の順序、文章全体の構成に気をつけて、内容の大体を読ませる。
- \*何について書かれた文章であるかを捉えさせる。
- \*文章の要点やあらすじなどにかかわって、文章の中で大事になる言葉や文を書き抜く経験を積ませる。

(中学年)

- \*目的に応じて、中心となる語や文を捉えさせる。また、自分の思いや考えを書くときに、中心となる語や文を適切に用いてまとめさせる。
- \*大事な言葉や表現の生かし方などを考えて、文章を引用したり要約したりする経験を積ませる。
- \*根拠を述べるための表現「理由は～からです。」を身につけさせる。

(高学年)

- \*目的に応じて、文章の重要な点を表現に即して的確に押さえて読み、要旨を捉える経験を積ませる。
  - \*筆者がどのような事実を挙げて理由や根拠としているか、また、どのような意見や主張で読み手を説得しようとしているか、などについて読み、それに対する自分の考えを明確にさせる。
  - \*条件を満たしながら、自分の考えを整理して書く学習場면을意図的に設定する。
- ・授業の中に対話を取り入れる。深い対話が生まれるための課題提示、発問、補助発問、関係づくりなどについて改善していく。

### (2) 社会科

#### □本校の課題

- ①基礎的・基本的な知識(用語・語句の意味)の定着に課題がある。
- ②資料の基本的な見方や必要な情報の読み取りに課題がある。
- ③社会科における思考力・判断力・表現力に課題がある。

#### ○改善に向けての方策

- ①授業の中で用語や語句の意味を確実におさえるようにする。
- ②資料の基本的な読み取り方を継続して指導する。また、指導者が資料の読み取りに対するねらいを明確にもち、発問や指示をしたり、視点を与えたりする。
- ③授業において、比較・関連づけ・総合といった思考過程を意識した考える場面を設定する。また、わかったことや考えたことを言語などで表現させると共に、対話を取り入れることで多様な見方や考え方があることに気付かせるようにする。

※児童にとって遠いイメージのある社会的事象を身近に感じられる環境を整備する。

## 8 実態分析と検証の手立て

### (1) 実施する調査

「全国学力・学習状況調査」「山梨県学力把握調査」「CRT」  
 「活用にチャレンジ・国語」「Q-U調査」  
 「チェック問題」「山梨県学力把握調査ピックアップ問題」

### (2) 実施日程

4月 「全国学力・学習状況調査」「山梨県学力把握調査」「CRT」(国・社)  
 5月・10月 「Q-U調査」  
 7月・11月 「学校生活アンケート」(学校評価児童用)  
 4月・11月 「活用にチャレンジ・国語」  
 1月 「チェック問題」「山梨県学力把握調査ピックアップ問題」

### (3) 調査結果の活用方法

○学力の実態把握と分析を行い、授業改善へ生かす。

「全国学力・学習状況調査」「山梨県学力把握調査」「CRT」(国語・社会)  
 「チェック問題」「山梨県学力把握調査ピックアップ問題」  
 「活用にチャレンジ・国語」「学校生活アンケート」

○お互いに支え合う人間関係を築き、共に学び合える学級集団作りに生かす。

「Q-U調査」

## 9 研究日程

日 程	研 究 内 容
① 4月11日(月)	・校内研究計画の検討
② 5月16日(月)	・授業改善プランの検討(国語科・社会科)
③ 5月30日(月)	・授業改善プランの検討(全体)
④ 6月 6日(月)	・指導案検討
6月15日(水)	・QUについての学習会【講師 品田笑子先生】
⑤ 6月20日(月)	・研究授業と検証【講師 多田孝志先生】
⑥ 7月11日(月)	・授業改善プランの見直し(国語科・社会科)
⑦ 8月18日(木)	・授業改善プランと指導案作成に関わって再確認
⑧ 8月23日(火)	・指導案検討(ブロック)【講師 多田孝志先生】
⑨ 8月29日(月)	・指導案検討(ブロック)
⑩ 9月 5日(月)	・指導案検討(ブロック)
⑪ 9月26日(月)	・指導案検討(ブロック)
⑫ 10月 3日(月)	・社会科指導案検討(全体)
⑬ 10月24日(月)	・国語科指導案検討(全体)
⑭ 11月 7日(月)	・公開資料の準備
⑮ 11月16日(水)	・公開研究会前日準備
⑯ 11月17日(木)	・公開研究会【講師 多田孝志先生】
⑰ 12月19日(月)	・今年度の校内研究の反省と研究紀要作成に関わって提案
⑱ 1月30日(月)	・今年度の校内研究の反省と来年度の方向性
⑲ 2月13日(月)	・授業改善プランの総括
⑳ 2月27日(月)	・研究紀要作成

